



遠藤り加さん

若い人たちが働きたいと思ってくれるような 新しい製造業を目指して

強い意志と行動力で業務の効率化・広報活動に尽力

株式会社 鈴木製作所 遠藤り加さん

「この会社を残していきたい」と入社を決意

「子どものころは家と近く、両親が働いていたこともあって、学校が終わると毎日のようにランドセルを背負ったまま工場に来ていました。宿題をしたり、社員の方に遊んでもらったりと放課後の時間の多くを工場の中で過ごしてましたね」と振り返るのは株式会社鈴木製作所の遠藤り加さんだ。

鈴木喜浩社長の長女として生まれたり加さんにとって、工場やものづくりはそこにあることが「当たり前」の身近な存在だった。とはいえ事業承継を意識したことはなかったという。大学卒業後は旅行会社やアパレルメーカーに勤務し活

躍していた。そんな彼女に転職が訪れたのは2020年、新型コロナウイルスの影響でアパレルメーカーの仕事が2カ月ほど休みになったことだった。

「時間に余裕ができ、将来について考えるようになりました。そして自然と、『このまま父が歳を重ねていったとき、会社はどうなるのだろう』と家業のことを考えはじめました。社長の子どもは私と妹の2人だけ。それまで父から事業承継の話がされたことはなく、事業を引き継ぐという考えはまったくありませんでした。『この会社を残していきたい』——そのために自分に何ができるのかを考え、すぐに父に『継ぎた

い』という意思を伝えました」(り加さん)。

創業44年、アルミの溶接に強み

しかしその申し出は当初、鈴木社長から断られたという。

鈴木製作所はアルミの溶接・加工技術に強みを持つ神奈川県横浜市の板金加工企業。アルミは熱伝導率が高く、溶接の際にも変形が生じやすいため、加工には高い技術が必要とされる。同社は創業以来44年間、「お客さまに満足いただけるものづくり」を目指して技術を培い、得意先からの高度な要求に応え続けてきた。中でも防衛関連機器(無線・レーザー)の板金部品加工は創業当初から続いており、現在も同社の売上の6割以上を占める。近年の防衛費増額などの影響を受け、防衛関係の仕事は増え続けており、内示レベルでは2年先までの予定が入っている状態だ。

また既存の技術だけにとらわれず、東海大学やアマダと協力し新たな異種材溶接の研究に取り組むなど、たゆまぬ努力を続けている。

「祖父は板金工場で工場長を勤めた後、独立し当社を創業しました。父も金属プレス加工企業で製造について学んだ後、入社しています。そんな中、加工技術や知識が何もない私が事業を引き継ぐのは難しいと思われたのかもしれませんが。会社の規模的にも一つの業務に集中できるわけではなく、あらゆる仕事を同時にこなす必要があります。父自身も事業承継にあたり苦勞したようで、子どもには重荷を背負わせたくないという思いがあったのかもしれませんが。後継者がいない場合はM&Aによる会社売却も視野に入れていたようです」。

「しかし、父から断られ考え直しても、私の中では継がないという選択肢はありませんでした。何度も父に相談し、ようやく了承を得ることができ、2020年10月に勤めていた会社を退職して、当社に入社しました」(り加さん)。

入社後は検査や品質管理、ISOを担当

入社後は品質保証部に所属し、製品の検査や品質管理、不良品対応などを担当した。品質保証に関わる幅広い対応が求められるため、覚えることも多く、最初のうちは頭を抱えることも多かったという。しかし、目の前のことをひとつずつ進めていくうちに次第に楽しさも見出せるようになってきた。品質マネジメントシステムISO9001を取得するにあたっては、従業員たちが理解しやすく、かつ日常業務の中に落とし込めるよう、要求事項の要点をかみ砕いたマニュアルを作成した。

2021年6月には鈴木社長からのすすめもあり、職業訓練法人アマダスクールのJMC(経営後継者育成講座)を受講した。鈴木社長自身も1995年にJMCを受講した経歴を持



(株)鈴木製作所のスタッフたち(右端は鈴木喜浩社長)。従業員の半数が外国人材でダイバーシティ化が進んでいる

つ。現在もそのときの縁でつながっている同業者は多く、協力して新規事業の開拓に乗り出したこともあるなど、お互いに良い意味で影響をおよぼし合っている。

「父からは日ごろから『横のつながりを大切にされた方が良い』と言われており、私も事業承継者としてJMCを受講したいと思いました。同期に女性(株)玉吉製作所・吉田夏菜さん)がいたことも大きかった。製造業はまだまだ男性社会という印象が強かったので、ほかにも女性後継者がいたことは心強かったです。家族で製造業を営んでいるというのは世間でいう『当たり前』ではありません。同じ事業承継者という立場で、悩みや不安を共有できる仲間ができるというだけでも参加する意味は十分にあったと思います」。

「受講する前は自分のことで精一杯の状態でしたが、受講後は『今の場所で最大限できることは何だろう』と視野を広げた考えができるようになりました。また、社内の製造に関わる一連の動きを知ることで、細かな部分に目が向くようになりました。たとえば、頻繁に立ったり座ったりが必要に

会社情報

会社名	株式会社 鈴木製作所
代表取締役	鈴木 喜浩
所在地	神奈川県横浜市都筑区 池辺町3288
電話	045-507-7831
設立	1986年(1980年創業)
従業員数	20名(技能実習生などを含む)
主要事業	無線通信機器、食品機械、医療機器、電気機器などの精密板金加工
URL	https://suzuki-inc.jp/



CORPORATE WEBSITE



①2次元CAD/CAMでプログラムを作成するり加さん／②パンチ・レーザ複合マシンLC-2012C1NT+MP-2512C1／③2023年12月に導入した自動金型交換装置付きベンディングマシンHG-1003ATC

なる業務に関してはイスを撤去したうえで机の高さを変えて立ったままでも作業しやすくしたり、作業動線を変えたりと、より効率的に作業が行えるよう、試行錯誤を行いました。アパレル業界で働いたときには、お客さまの動きを予想して商品配置や店内のレイアウトを決めていたので、そのころの経験が生きています」(り加さん)。

「ノウハウの共有化」と「標準の作成」を目指す

り加さんは現在、プログラムを中心に生産管理、品質管理、営業関係などを担当している。防衛関連機器は品質管理がきびしく、細かなキズにも注意が必要なため、品質的な基準として落とし込むことが難しく、その対応に丸一日かかってしまうこともあるという。

同社の場合、単品や小ロットの仕事が多く、製品によっても勝手が異なるため、マニュアルを作成することは難しい。対策として考えているのは細かなキズや状態などへの対応の基準をつくり「考えの標準化」をはかることだ。標準化がうまく進み、DXと組み合わせることができれば、安定して高品質な製品を短納期で提供できることにもつながり、会社の強みにつながるのではないかとり加さんは期待を込める。

もうひとつの課題としてノウハウの属人化がある。現在はマシン1台につき、オペレータが1人ついている状態で、担当者が休むとマシンも止まってしまう。加工ノウハウが担当者固有の暗黙知となって社有化されておらず、加工条件、精度などが明確ではなく、担当者が急に休んだ際の対応に苦慮することがある。そのため、「既存のやり方が一番効率が良いかどうかは本人だけでは判断が付きません。まずは作業の洗い出しからはじめようと考えています」という。

「私は思い立ったらすぐ行動に移したいタイプ。失敗することもたくさんありますが、『まずはやってみよう』をモットーにしています。日々の業務を通じてさまざまな課題が出てき

ます。私自身は現場の加工はしていないため、どうしても机上の空論になってしまう部分もあります。どうしたら良いか考え、必要に応じて現場に相談や確認を取りながら社内改革を進めていきたい」(り加さん)。

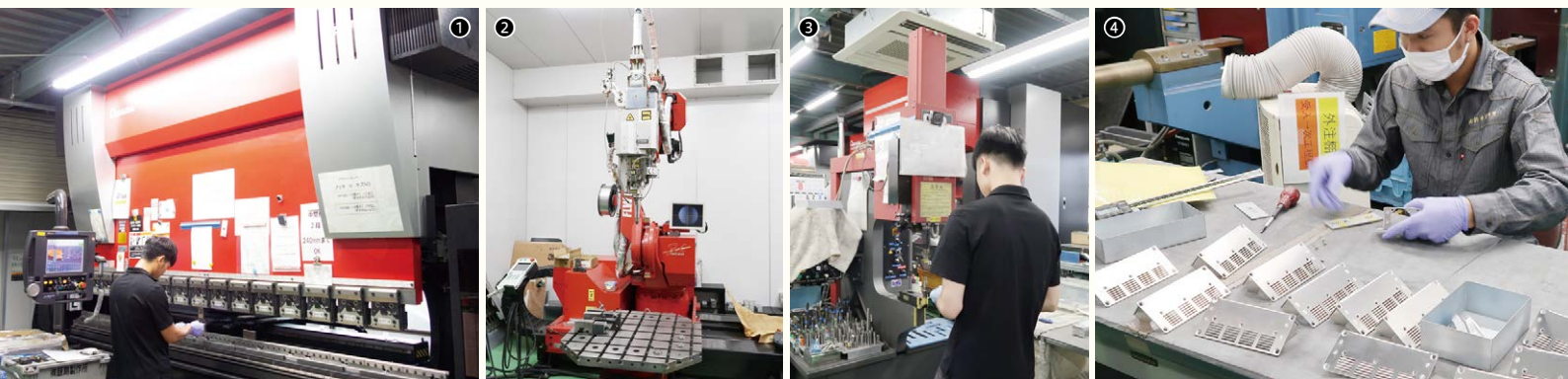
従業員の半数が外国人材のダイバーシティ工場

同社では材料調達から加工、めっき・塗装・シルク印刷、マーキング、組立までを一貫して加工する仕事が多いため、塗装など外注する工程のことも考えると、社内で加工するのは製造リードタイム全体の半分ほどの時間で終わらせなければ間に合わない。短納期に対応するため、同社ではすべての従業員がタブレット端末を持ち、進捗・実績を入力し、生産管理を行っている。

従業員数は20名で、そのうち半数にあたる10名がベトナムから来た外国人材(特定技能2名、技術・人文知識・国際業務(技人国)2名、技能実習生6名)となっている。基本的に業務の指導や引き継ぎに関してはベトナム人の先輩から後輩へ行うことになっているが、り加さんから説明が必要な場面も出てくる。その際には口頭のみでは伝わりにくいいため、生産管理システムを活用したり、実際のものを見せ、絵を描きながらすり合わせを行っているという。り加さんが推し進める社内改革はムダを減らし、効率を良くするとともに、こうした外国人のスタッフにもわかりやすく安全な作業を行ってほしいという思いが込められている。

製造業の魅力を若い人にどう伝えるか

「私は製造業はすごく魅力のある業界だと思っています。板金加工業の場合は一枚の鋼板から切り出し、曲げ、溶接、めっき・塗装、組立と工程が進むごとに異なる見た目が変わっていく。プログラムしたものが実際に出来上がるという面白さもあります。また、製作した製品がどんな機械のどんなと



①ベンディングマシンHD-1303NTによる曲げ加工／②2021年に新規事業の開拓のために導入したファイバーレーザー溶接システムFLW-3000ENSIS／③ファスナー圧入機でカシメ作業を行う／④加工した部品を組み合わせ、ネジ止めする

ころに使われるかと想像できる余地があるところも魅力だと思っています。世間では未だ3Kのイメージが強く、若い人が入ってきづらいという話も聞きます。私は新卒者に人気の企業ランキングでもっと製造業にランクインしてほしい。

「ものづくりの魅力を知ってもらい、興味を持ってもらうことができれば、必然的に人手不足の解消にもつながっていくのではないかと期待しています。製造業で働きたいと思う人たちが増えてくれば、会社の動きや見られ方も変わり、製造業のイメージも従来のものから大きく変えることができるのではないではないでしょうか。女性や男性、トランスジェンダーを問わず、やる気のある若い人たちが働きたいと思ってくれるような会社にしていきたい。そのためにまずは課題である仕組みづくりの部分から進めていかなければなりません」。

「また、広報活動に関しては、現在もコーポレートサイトやInstagramを活用していますが、効果的な運用はできておらず難しさを感じています。夫がアパレルメーカーの広報を担当していたので、これからは会社の見せ方に関する部分では対応をお願いしたいと考えています」（り加さん）。

り加さんの夫・遠藤拓さんは2024年8月に同社に入社したばかり。前職ではブランドイメージの発信業務に携わっていたという。り加さんとは学生時代にアルバイト先で出会ってお付き合いをはじめ、2020年に結婚した。そのため、拓さんはり加さんが事業承継を決意し、会社のために奮闘する姿を誰よりも近くで見えてきたという背景がある。

拓さんは「物おじすることなく、すぐに決断してみずから動く彼女のことはカッコいいと思っています。彼女のサポートをしたいとの思いから当社に入社することを決め、社長にも相談しました。先日はGMC（板金総合4カ月コース）を受講させていただき、8月になって入社したばかりです。前職で培った知識や経験をもとに広報活動などを行ってきたいと思っています」という。

り加さんは「入社してくれるとは思ってなかったのが驚きましたし、本当に心強いです。設備の導入も含め、これから先決断しなければならぬことがたくさん出てくると思います。より良い答えを導き出せるよう、話し合い、協力していきたいと思っています」と笑顔で語っている。



①品質チェックをするり加さん。同社の受注全体の6割以上を占める防衛関連機器は品質管理がきびしく、細かなキズにも注意が必要だという／②「(り加さんの)サポートをしたい」と2024年8月に入社した遠藤拓さん(左)。夫婦2人で協力して同社を盛り立てていく